
漆黒の狂戦士と薄幸の魔王

流狼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の狂戦士と薄幸の魔王

【Nコード】

N9026K

【作者名】

流狼人

【あらすじ】

マスターである雪の少女・イリヤを守れずに消え逝く益荒男。そんな男を世界は一つの世界・女だらけの三国志に送り込んだのだ。た。

設定(前書き)

馬嵯禍やFate似のオリキャラの設定です。尚、登場する順番で書きます。もしかしたら、没キャラを乗せるかもしれませぬ。

(ネタばれとして1、張?<ちよубく>ゝ一成。2、韓遂<か
んすい>ゝ綾子。3、激動たる侯成・眩惑の魏統・静かなる宋憲
<こうせい・ぎぞく・そうけん>ゝ楓・由紀香・鐘。)

設定

バーサーカー 馬嵯禍

説明要らずの主役

統率・・・2

武力・・・6超

知力・・・3

政治・・・1

魅力・・・2

<宝具>十二の試練〔ゴットハンド〕

Aランクに満たない純度の攻撃を無効化するとともに、十一回まで自動蘇生する。 改正前

武力4に満たない攻撃を無効化するとともに、十一回まで自動蘇生する。 改正後

程遠志 雁葉〔かりば〕 真名：聖羽〔せいはい〕

勇義の将だったが国に愛想を尽かし黄巾の将になったが、義勇軍に破れ賊に落ちぶれてしまった。その後自分の元にいた兵を養うため、

月を追い詰めたがバーサーカーの鉄拳に倒された。そしてバーサーカーの元で再び勇義の将として鍛えてもらうため、月の軍に下った。髪は金色で後ろに束ねている。肌は雪のように白いが本人があまり好きでない為土で茶色くしている。顔はきりつとした侍な感じ。性格は粗暴だが、尊敬する人にはなれない敬語で話すなどわかりやすい性質。左腕に黄巾を巻いているのは過去への戒め。(言いやすくすれば容姿：セイバー・中身：オルタ似) 典型的な猪武者。華雄と同等。義勇軍へ主に関羽に恨みあり。ちょっとしたことであつてしまう。

統率・・・4

武力・・・4

知力・・・3

政治・・・3

魅力・・・3

王允 子師 真名：葛木

官位は司徒。月に政治学を教えたことがある。政治家になる前は暗殺業を営んでおり、”蛇”と呼ばれていた。の乱の時、ついに朝廷に嫌気が差し月の元へ行つた。

姿はfateの葛木に官服を着せたような感じで、性格はfateの葛木を少し丸くした感じ。

統率・・・3

武力・・・4

知力・・・4

政治・・・4

魅力・・・3

牛輔 真唐 真名：慎二

中郎将と首都警備隊隊長の肩書きを持つ男。野望が強いが言い様に振り回されやすく、十常侍によく利用させていた。の乱の時も利用されそうになった（利用されていた）が気持ちを整理し月と共に戦うことを決意した。武器は「来蛇」という両刃戦斧。

姿はfateの慎二に董卓軍の鎧を着せたような感じで、性格はfateの慎二を少し丸くした感じ。設定としては月の兄的な存在？

統率・・・2

武力・・・3

知力・・・2

政治・・・1

魅力・・・2

李カク 稚然 真名：小次郎

農民から侍大将になった出世頭。相棒である羽賛とは、殺し殺されるぐらいの中の良さ」と豪語している。女は花の様に愛でるべきと思っており、女が戦場に出るのを嫌がる節がある。乱世の終結を待ち望んでいる。使う武器は「佐々鬼」という長い太刀。

姿は fate のアサシンに服の色を紫ベースにしたような感じで、性格は fate のアサシンの感じ。決してサーヴァントではない。

統率・・・3

武力・・・4

知力・・・3

政治・・・1

魅力・・・3

郭シ 朝進 真名：羽賛

常に月の近くにいる男。その正体は の私兵であるのだが、その待遇に嫌気が差し董卓軍の将になった。投げナイフの達人。右腕は異様に長く顔に白い髑髏の仮面を被っている。葛木とは元暗殺者同士。

姿は fate の真アサシンそのまま感じで、性格は fate の真アサシンの感じ。決してサーヴァントではない。

統率・・・2

武力・・・4

知力・・・2

政治・・・1

魅力・・・2

李儒 文優 真名：桜凜

董卓軍第二の軍師（ねねは呂布専属）。朝廷内では猫を被っているが、知人の前では素に戻る。基本、根は真面目で恋の家族の面倒も良く見ているが、冷静で冷酷な指示を出すこともある。土郎とは恋人同士。詠がいきなりドジっ娘なら桜凜はうっかりドジッ娘。リンデレでもある。説明する時、眼鏡を掛ける。
姿はf a t eの凜と桜を割り文官の服装をした（髪は凜。）感じで、性格はf a t eの凜と桜を足して2で割ったような感じ。

統率・・・4

武力・・・3

知力・・・4

政治・・・4

魅力・・・4

徐栄 衛宮 真名：士郎

董卓軍古参の将。渾名は「堅守」。評価理由曰く、<平原に砦を築いても彼が指揮をすれば難攻不落の城塞となす> 実力は董卓軍第四位に該当し、恋との一騎打ちでは三十合近く切りあい、その結果は引き分けで終わっている。使用する武器は「赤鉄・赤原」の双振りの刀である。普段、人をからかったりしているが戦場に立てば自ら進んで切り結んでいく切り込み隊長。桜凜とは恋人同士。姿はfateの士郎・・・というよりアーチャー似（特に髪）な感じで、性格はfateの士郎の熱血とアーチャーの冷静さを兼ね備えた感じ。鎧もアーチャーの紫ベース。

統率・・・4

武力・・・4.7

知力・・・4

政治・・・3

魅力・・・3

設定（後書き）

前書きの人たちは外伝で出すかもしれませんが。明日、三話目をお届けします。

出会い（前書き）

がんばって参ります。応援お願いします。

出会い

side少女

ここは、主に騎馬民俗が住まう国 涼州。今、私は走っている。

「はあ、はあ、はあ」

森を駆け、いや・・・にげている。

「くくく。追いついちゃうぜ。御嬢ちゃん。まあ、貴族様なんだから金目のもの置いてけば助けてやらんこともないがな。くくくく。」

と、賊の一人が追い詰めてくる。他の賊たちも「そうだそうだ」と、便乗する。

遂に私は森の祠の前で座り込んでしまう。

「いやあ。いやだ。来ないで下さい。」と私は心細く言うが、

「無理だ。散々走らされたんだ。小さいなりでも慰めも者には、なつてくれるだろう。」と。

賊たちは、いやらしく下賤な目で私を見下す。もう駄目だと諦めてしまいそうになる。

目が熱くなって涙が溢れて出て来る。

「助けて。誰でもいい・・・助けてください!!お願いします!!」

私は頭を下げ、願う。感嘆する。助けて詠ちゃんと。華雄さん、霞さん、恋さんと。

すると・・・

目の前に

さっきまでなかった、黒い大きな壁があった。

side 巨人

私は消え行く。塵に消え行く。

「ハ、他愛もないな。とつとと王の前から消えるがいい。」
金色の髪をしたイレギュラーが無数の武器・宝具を放ち、私を塵にした。

そいつの目はもう自分に向けておらず、わが主たる白き少女の方を向いていた。

「・・・イリ・・・ヤ・・・に・・・げ・・・」

この身、バーサーカーたる存在でも、生前から狂っている身だ。声を上げ少女を逃がそうとした。

されど、もう首まで塵になった身。ただただ、少女が危機を脱するのを願うしかなかった。

私が最後に見たのは……………

少女が……金色のイレギュラーに……心の臓器を抜かれる様だった……。

ズーんとひとときわデカイ壁が、否。漆黒の巨人がただずんでいた。更にいえば、巨人の右手には無骨ながら巨大な斧剣が握られていた。

「な、なんだ。なんなんだ。これは。」
賊たちは突然現れた、巨人に驚き腰を抜かしたのもでも現れた。無理もない。

「あ、あの、あなたは、いったい？」

少女は勇気を出し、壁になってくれた存在に問う。

「」

巨人も顔は仏頂面だが、内心混乱している。だがこの少女には主・イリヤに何所か似た雰囲気があった。

故に、するべきは一つ。

「——問う——貴女は——我が——新たなる——主——か——」と、
巨人は途切れ途切れに問う。

少女は戸惑いながら。されど、強く。……うなづいた。

巨人もそれを確かめると賊たちのほうを向いた。いや、にらんだ。

—— 汝らは、—— 敵か——、と。

「ひ、ひ————————————————————————————————!!
無理だ!! お、おれは抜ける————————!!」と去っていく。

一人抜け、二人、十人と逃げ去り、賊は一人だけ残った。

「畜生————!! だ、だ、誰だてめ!。俺をだ、誰だと思っている。黄巾にそ、その人ありと言われた程遠志さまだ!! この大斧で頭がち割られなくては、とつとと消え失せる。」

そう言っている・いや喚へわめいていっている賊がいた。

手に持つ斧を水車の如く回す賊・いや女将はびびりながらも。巨人に突貫した。

が

「かっつっつっ!! はが!!」

と、何かに当たり負けしたが如く、地をのたうち回りながら後ろにあった大木に激突し気絶した。

巨人はただ拳を、されど鉄拳を女将にお見舞いした。

その時、少女にある言い伝えが頭を過ぎった。

王が嘆くとき

次元を破りて荒々しき黒き英雄がこの地へと来る

その者、破壊と勇士の力をもって全力で主を守護するもの

その者のは――。
と。

「これが、いえ。あのお方が、伝説の英雄 馬嵯禍へバーサーカー
」。

言い伝え曰く、白き少女を護るもの。

曰く、その武 兵一万は足らず、その脅威 英雄百人で同等なり。

曰く、命がけの試練、十二関門も突破し十二の命を与えられた者。

曰く、その剣技・弓技は無双なり。

曰く、その者を引き連れるものは 王たる器なり、と

少女が伝説を思い出していると、巨人がこちらを向いているのに気づき なにかと、首をかしげた。

「―― 契約―― 完了した―― 我、―― 主の障害を―― 打ち破る
こと―― 我が力―― 狂戦士へバーサーカー」として―― 誓う――」

巨人はそういって少女に膝を折って忠誠を示した。

「あ、はい。お願いします。馬嵯禍さん。」

少女も頭を下げ

「私の名前は董卓、字を仲穎。あ、真名を月ゆえ」といいます。月と呼んでください。」

と笑顔で名乗った。

次回 開戦前夜

出会い（後書き）

はじめまして。流狼人です。

頑張って妄想に励んで活きたいと思います。

オリキャラは後3・4人です。

主に誤字脱字、人物の思考・言葉使いの批評を待っています。

お願いします。

明日、登場オリキャラを乗せるつもりです。

開戦前夜（前書き）

感想あるって素晴らしいです。返信は追って行きます。

開戦前夜

side 華雄

我が名は華雄！字を雄起！！真名は蘭だ！！！！

なぜ紹介だと！！原作では字も真名も出てこないからだ。せめて、この外史では・・・と少し寄り道してしまったが。

とりあえず月様が新たなる将を紹介したいからと、いつから来て見たら、

壁だ！・・・・・・・・・・いや黒くデカイ人物が、月様の隣にただずんでいた。

その近くで・・・・・・・・賈？（詠）が泡吹いて倒れていた。

張遼（霞）は・・・・・・・・衛生兵ー！と叫びつつ槍を持ち月様を護る為駆け様としていた。

呂布（恋）は・・・・・・・・恋殿ー！と泣いている陳宮（音々音）をあやしていた。

「ちよ、蘭！！はよせえ！あいつから月っちを取り戻」なんだとて

めえ！！！旦那のことあいつだと！！やんのかこら！！」ああ。
もうなんや自分！！」っと、霞に食ってかかる。賊っぽい女が吠え
ていた。

「俺は程遠志！！旦那の舎弟だこら。わかったかこら！！」

ふむ。あいつはなかなか見所があるな。なぜか自分と波長が合いそ
うだが。

「ふう。いい加減にしろーーーー！！！！貴様ら、月様の御前
だぞ。少しでも落ち着けーーーー！！」っと。まったく。

20

「ら、蘭がまともなことを・・・・まさか偽者か！！」「本物・・・
だす。」

と霞に恋。

はははは まったく・・・・ぶっちゃん

「貴様らー！ー！言うに事欠いてなんだー！表に出ろー！おいお前も来るか！ー！」
とあのデカブツの隣にいる自称<舎弟>に聞くと。

「上等だ。てめー足ひっぱんなよ！ーあと、自称じゃない。これから大陸に響かせるんだ！ー」

・・・うむ！ー！

やはり、波長が合うなこいつとは。

side 馬嵯禍

ふむ。

姦しいな。女も何人寄ればなんとやら、と誰かが言っていたな。

あの中で一番最初に真名を許してくれたのは主たる月と蘭、聖羽（セイハ）（程遠志）だったな。

そうだ、真名とはなにやら神聖なもので他人が勝手に言うてはならん名前らしい。自分の知っている真名（シンメイ）とは意味合いがまったく違うらしい。

だが、嬉しいものだな。認められるものは。

蘭は何かと勝負したいと私に挑んでくるのだが・・・まあ、結果はわかったも同然だな。

私とて大戦士と呼ばれた身。やすやすとは負けん！！

聖羽はなにかと私のそばに居る。

なんでも「あなたの強さに惚れた！！舎弟にしてください！！」っとあの後、体を引きずって来た。あの精神を見せられたら否と答えら

れるものなど・・・いやいるな特にあの金色のイレギュラーは傲慢な態度で言いそうだな。

聖羽も蘭と一緒に勝負してくれー！と云いながら突っ込み・弾かれ・立ち上がり・再び突貫！の繰り返しだ。

御陰で体が少し丈夫になったようだ。

その後一騎打ちで霞と恋二人も中々強い。が、勝つのは私だ。音々音々恋殿がいうならー！、兵達の訓練で詠が真名を教えてください。

まあ・・・詠は中々認めようとしなかったが、「え~~~~い~~~~ち~~~~ん~~~~」(笑顔)。「と月が物凄い顔で説得して納得させていたな。」

なにやら前にイリヤが見ていた某魔砲少女(?)に出てくる星光魔王が部下に砲撃した時に似ていたな。

……イリヤがああ成らないことを祈りたいものだ。

side月

クレスさんが入ってくれたおかげで兵隊さん達の訓練が良くなったと思います。これで戦で死んでしまう兵隊さんが少なくなるかな？

ああ。クレスさんというのは馬嵯禍さんの真名　ヘラクレス　を短くしたものなんです。やっぱり長いと呼びにくいなと思った時に「呼び——にくいなら——短くとも——良い——」といったくれた以来皆さんもクレスやクレさん、クレっちとさまざま呼び名で呼んでいます。クレスさんも馴染んでくれたかな？

あ。後クレスさんの伝説は董家の女が髪白い理由として挙げられているものです。小さい頃、御父様が御話してくれました。それ故に「化け物・魔物の家の子」として疎まれる理由にもなっているのですが。

つと。そういえば黄巾賊の戦いが終わったそうです。なんでも各地の幽州の義勇軍・江東の孫策・陳留の曹操が中心になって反乱を鎮めたそうです。

へううううううう。皆さんすごいですね。

そんな時、都の何進大將軍から収集が来て私たちは洛陽に向かいました。

が、その道中なんと何進大將軍が殺されたと聞き、すぐに都へ向かいました。

すると、こちら側に向かって馬車が一台。その中からなんと……

side 善徳王

あ、はい私の名前は劉備・字は玄德。真名は桃香といます。夢はみんなが笑顔で居られる国を作ることです。その為に愛する義妹二人や軍師二人。あと友達のパイパー「白蓮パイレン」だー！」たちと一緒に反董卓連合軍に参加しています。

帝を操り、都で民に酷い事をしている董卓さんをみんなで懲らしめようと袁紹さんを筆頭に連合を結成、私たちも組むことになり先陣に借り出されています。

捨て駒な感じですが、幸い孫策さん達が手伝ってくれているというので、なんとかなるかなっと思っていたのですが……

「
―――
―――」

「ぎゃ―――！た、た、助けてくれー！……！」「じにだぐないー
―――！」「かあああああちやあああつぶげらー！」「ひ、ひ
―――！―――！―――！おお、俺は逃げる―――！……！」

な、何ですか！……！何なんですか！……！ あ、あの人（？）は――
―――！……！！

開戦前夜（後書き）

第二段です。流狼人です。絶賛だらけ中です。でも、株って楽しいね。と思いつつ妄想の限り書いています。あと無双過ぎるバーサーカーの能力変換は次回に載せます。あと能力値はビジュアルブックを参照にしています。

慟哭（前書き）

遅くなつてすいません。できるだけ書くスピードを速めたいです。
あと、煌 焔の案なんです。自分としては、アンダーバーのほう
が分かり易かったため以後もこうして行くのでご了承承ください。

慟哭

「猛将と呼ばれた華雄よ！貴様は我等に討って出てくることすら出来ぬ臆病者か？くやしければその姿を関から出してはみてはどうだ！？それすらも出来ぬか？愚鈍な亀が！猛将というのはどうやら噂の一人歩きだったと見える！それとも貴様は自身の武を自らで吹聴して回ったのか！？どうした華雄！こつも言われて出てこぬとは私の言葉が的を射ているのであろう！？凶星を突かれ慌てている様が目に浮かぶわ！」と関羽が。

「負け犬の華雄よ！今度も我が孫家に勝利をもたらしてくれるものよ！早く出てきてその頸を置いていつてはくれまいか？我が母孫堅にくれたように私にも勝利を渡してもらおう！此度も背を見せ逃げ惑う様を私に見せてくれ！」と孫策が。

蘭を罵り上げ外へ出そうとする連合軍先鋒の将たち。

勿論蘭は・・・

「UGAAAAAAAAAAAAAAAAA！！おのれ！！！！
！！出撃だ！！！！」と咆哮していた。

「っく、なんだー！」

「私が――出よう――」

その声には威厳。その出立ちふいでたち々は威風堂々なる……
歴戦の戦士の趣があった。

「あ、ああ。」と華雄はただ許可するしか出来ないほど・・・言葉が見つからないほど勇ましかった。

（（（（これが、英雄と云うのか！！！！））））関内のみなはそう思った。

「でも、何でも。何で旦那が！！」

聖羽はそう問いかける。返ってきたのは

「理由——主を——悲しめた——こと・・・何より——武士くものふくと——して——彼らを——出迎える・・・唯——それだけ——だ」

と答えた。

御照覧あれ、愚者たちよ。数の暴力とは違った……真なる力
<暴力を>!!!

side 連合軍

作戦は華雄軍が出てきたら撤退し、後方の連合軍に擦りつけその隙にシ水関を落とすものだった。

だったが……。

出てきたのは上半身裸だが鍛え抜かれた筋肉を堂々とみせ、右手には無骨な巨剣を持ち、全身が鈍い鉄の色をしている……山のよ
うな巨人であった。

「き、貴様何者か!!」 関羽は戸惑いながらも問いかける。近くに
居た孫策も身構える。

「我が身――狂戦士……主の敵を――
の――」
――薙ぎ取るも

そういつと巨人は武器を後ろに構え、片目を赤く光らせ。

「――いくぞ……我を――倒して――見せる――!!」

と息を少し吸い込むと……。

がら関羽に突っ込んだ。

———!!と叫び、いや咆哮しな

「つつつく!!!!」と関羽は咄嗟の判断で後方へ馬から跳び・・・逃げた!

その判断は・・・
「ウウン!グチャ!!」
———!!」ブ

合っていた!!

そこにあつたのは・・・巨剣と振り下ろした巨人。そして、肉塊と化した馬の成れの果てと陥没した地面であつた。

「つつつく。はぁー！ー！ー！」と体制を整えた関羽は気合と共に武器である青龍偃月刀と振り下ろした。巨人は何てことも無く巨剣で防ぎ、切り返すように横へ薙ぎつた。関羽も偃月刀の柄で防ぐも衝撃が防ぎ切れず後方へ吹き飛ばされた。

そこへ巨人は巨剣を振りかぶり、止めを刺さんと振り下ろし噴煙を撒き散らした。

だが・・・噴煙の中より関羽が跳び上がり再び気合を込め偃月刀を頭上へと振り下ろした。

が、巨人はそのまま巨剣を振り上げまたもや一撃を防いだ。更に、関羽の片足を左手で掴み地面へ叩きつけた。

「う、うわぁー！ー！ー！つぐは！」と関羽は悲鳴をあげた。

だが、これで終わる筈も無く関羽を掴んだまま持ち上げ、振り返るように後ろを向きその反動を利用し再び地面へと叩き込んだ。

「……うう……うあ……ああ……」とさっきまでの勇ましさが微塵も無くなり、呻き声しか出せなくなってしまった関羽の姿は……

もはや、誰が見ても重傷以外見当たらず、美髪と謳われた髪は……血に染まりボサボサになっていた。

そして巨人は、ふと見つけた緑色の旗が揺れる陣へと関羽を放り……いや力の限り投げた。

人間砲弾となつた関羽は陣へ飛び、櫓を貫き血まみれのボロボロとなり愛しき主の前まで転がり倒れた。

直後、陣から皆にも聞こえるぐらい大きな悲鳴が上がつたのであつた。

「つく!」と孫策は毒づき、陣へ戻ろうとした。が、

「-----!」

の雄たけびと共に巨人が孫策と自陣の間へ落ちてきた。

巨人は、元いた所から孫策の前まで跳躍したのだった。

「んな馬鹿な！！」と孫策は叫んだ。が、「

————！」と雄叫びと共に巨剣を振り下ろした。

噴煙から出てきたのは肉塊と化した馬と・・・剣と鞘の双振りを変
差させ、地を背にし巨剣を防いだ孫策の姿であった。

が

「つく！つが！！あああああ！！」と孫策が悲鳴を上げた。そ
のほず、巨人が剣に力を入れ孫策を押し潰そうとしていたのだった。

「策殿を守れー！ー！」と妙齡の女将が兵たちを指揮し突撃してきた。

兵たちは剣で斬りつけ、槍で突き、弓で射抜こうとした。

が、

巨人の肉体が全て弾いてしまった。

しかし、その隙を付いて孫策は巨剣をずらし陣へ走って・・・全速力で逃げ戻った。

巨人は追撃しようとしたが入れ替わるように陣から赤い鎧を着た兵五百余りが突貫。

「王を守れー！！」と叫びながら槍を突き出したのだった。それに巨人はその勇気に答え、巨剣を両手で持ち頭上へと持ち上げ・・・。

ただ・・・振り下ろしたのだった。

振り下ろしただけ。ただそれだけで、百の兵は吹き飛び、半分は屍となった。

だが巨人は止まらず剣を右へ、左へと薙ぎ払い、左腕に力を込め騎兵を穿ち、暴風の源なる脚で兵を蹴り飛ばし・踏み潰し、兵たちを殺戮・蹂躪していった。

「おのれー！ー！我は孫堅四天王。双剣の祖茂なりー！ー！！いぞー」
「グチャー！！」と名乗り上げた将すら手も足も出せず肉塊に変えられてしまった。

辺り一面を血の海に沈めると、巨人は連合軍の陣を見つめた一言

「——その程度か……また——相手してくれる——」

そういつと、背を向け関へと帰っていった。

関からは惜しめない歓声が上がったのであった。

連合軍は”魔王董卓の破壊神なり”と恐れたのであった。

慟哭（後書き）

は。バーサーカー無双……. なったかな？難しいですね。戦うシーン

読んでくださった皆様。感想待っています。

幕間：乱の兆し（前書き）

今夜中にも最新話を投稿させたいです。

「オホン。それにしてもあの巨人は誰よ。」と、ヒスってる袁紹を無視して情報を得ようとするのは、小柄で袁紹の金髪グルグルを小さくした冷静な少女は、小さき霸王こと曹操であった。

「・・・・・・・・・・」

だが、結果は分かりきつての皆無であった。

つと、そこに。

「もしかしたら？」とポツンと呟いたのは茶髪を後ろでまとめた少女・馬超である。

「何か思い出したの？」と曹操は尋ねてきた。

「ん？ああ。そういえば、董卓に関わる伝承が在ったなっと思って思い出したのさ。なんでも、ある家は女達の髪の色素を献上する代わりに一騎当千にして複数の魂を持つ巨人を従えているっつな。でも、御陰で匈奴に悩まされることは無いぐらいでな、”かの巨人ある限り蛮族、漢土侵略できず”なんて言い伝えられてるんだぜ。でも、60年前に家同士の争いの折に、巨人との契約が切れたらしく家自身没落していったらしい。でもって、董卓がその家の末裔らしいだよ。」つと、馬超が長々と話している傍ら。

「確か、御爺様の書の中にそんな御伽話があったわね。其れがホントなら……」と、曹操が考えごとをしていた。

その後、袁紹の癩癩が収まった頃に解散となった。

その頃。

孫策の陣はまるで御通夜並みに静であった。

「つく。祖茂！」と泣いているのは、老将黄蓋であった。彼女もまた孫堅四天王の一人<双弓>と名乗っており祖茂とは盟友であった。

「おのれ！！おのれ！！！」と泣きながら怒っているのは孫策の妹、”碧眼”孫権であった。

小さい頃から剣術の指導をしてくれた恩師の死は衝撃的で、尚且つ遺体は見分けつかなく遺品である孫堅から賜った剣のお陰で分かつたくらい、ひどい状態であった。

その陣中。孫策と周瑜は、祖茂への別れの盃を酌んでいた。

「それにしてもあの巨人、厄介すぎる。」と周瑜は、毒ついていた。「仕方ないわよ冥琳<周瑜の真名>。あれは、ヤバ過ぎる。瘦躯は

鉄で、心は破壊の塊よ。まったく。」と、実際剣を交えた……
というより、命拾いした孫策は酒を飲んでいた。

「所で、なんで華陀を劉備の陣に？確かに関羽が死にかけていると
は聞いたが？」と孫策に問うていた。

無理もない。

医者も、こっちも欲しいのだ。あの巨人の暴威から、命拾いした兵
士も少なからずいたが、一種のトラウマになっており江東に送って
治療させる予定でもいた。

「……あの時、私の方に来ていたら……って思ったら……
ね。」と、孫策は月を見ながら、されど体を少し震わせながら酒を
飲んだ。

周瑜は黙って、されど孫策に寄りながら酒を呷った。

その後、自棄になって袁紹自身軍を動かし……

ガラ空きの泗水関を占拠したのだった。

その頃、馬嵯禍達は必死に虎牢関を目指していた。

また、華雄の懐には一通の紙があった。

「首都陥落、つと。」

幕間：乱の兆し（後書き）

次回。ほぼオリキャラだらけのお話です。

期待してね。

危機（前書き）

自分のスピードで書いていきたいです。

危機

side 洛陽

ここは王允邸。その主の間にいるのは一人の男、王允子師。その風貌は波岸にそびえる岩壁の如く、その心は血の枯れた狼の様な男であつた。

そんな男の手元には書が……（偽）勅旨があつた。

何で偽書なのかだと。今帝の周りには董承一派という過激派が跋扈しており、帝お気に入りである董卓のことを嫌っているのであつた。そのため、この混乱に乗じて董卓を排除する為、あるうことが帝を脅して勅旨を書かせたのだつた。

「ふう。」

と溜息をつき、「せん無きことか。」と呟き、目を閉じ月を仰ぎ。

拳を鳴らした。

所変わって董卓邸……から離れた所。

董承が兵を起こし、董卓に対し 魔王討伐 を宣言し都洛陽に火を着け、その全責任を月に擦り付けていたのだった。

二人は。いや……四人は追ってから逃げていた。

二人とは月と詠。

もう二人とは、一人とは侍……そういうしかないほど流麗な侍大将、名を李カク 字を稚然、真名を小次郎。

もう一人を髑髏の仮面を被った全身真っ黒な男、名を郭シ 字を朝進、真名を羽賛ハハサンヤであり、二人とも二人の護衛であった。

「クソ、董承め!!!月が何したって言うのよ!!!」と詠が毒付く。

「仕方なかるう文和よ。彼者の性格を熟知できなかつた我々の責でもあるんだからつつつな！」と飄々と涼やかな声色と裏腹に敵を瞬時に切り捨てていく小次郎。

「・・・フカク・・・」と淡々とした声で矢を射ようとする敵兵に短刀を投げ、近づく敵の腸を自慢の超腕でブチマケテ行く羽賛。時折月が「ひう！」と怯えるのは仕方なかるう。

「しかし良いのか？お前は奴の私兵だろうが。」と小次郎は羽賛に問いかける。が、

「ベツニイイ・・・ユエドノ・・・イノチ・・・ワガミニカケテ。」と、淡々と短剣を投げる羽賛。こういう時に最も頼りになる男だった。

虎牢関へ続く門に着くと二つの人影があった。

「「（ツビク！）せつ先生！」と月と詠が困惑し、「ツム。ぬしか。」と小次郎が呆れていた。

「んな！なんだよ！この僕がいちゃワリーのかよ！！」と当り散らすのは牛輔 字を真唐、真名を慎二であった。

その傍ら黙して黙った居るのは、”先生”と呼ばれた王允 真名を葛木であった。

なぜ、先生かと言われるのは……謎である。おそらく雰囲気。

「行くのか」と董卓に問いかける葛木。

「うう、はい。」とドモリながらも答えた。

「なぜだ。」と再び問う葛木。

「この先には、私を慕ってくれた大切な仲間が……家族がいるからです。」

と、今度はハッキリと答えた月だった。

問いを聞いた葛木は……

「そうか。」と眼鏡をはずすと

「今からでも、私を家族と思ってくれるなら……行け。」

と背を向けて襲い掛かってくる敵を一閃。拳で一人ずつ確実に素早く仕留めていった。

その背には、早く、と、語るようであった。

「な！何やってんだよ、おい！！勝手なことをするなよ！！」とびつくりしている慎二。だが、

「ほう。ならば、おぬしはどうするのだ？くつくつく。」と小次郎は笑いながら慎二の首に長刀を、「……ハヤクシロ……」と羽賛は超腕を構えながら問う……いや脅す。

「ふん。あんな蟲やろうから官位を貰うんなら、実力で奪ったほうが何百倍もマシだっつーの！ましてや、あいつに泣かれてみる！！」
「・・・・・・・・リョフガ・・・・チヨウリョウガ・・・・カユウガ
<ガタガタ>」と、敵を叩きのめしながら震えながら答えた。

「ふむ。そうか」と葛木は納得し、逆に「お前こそ。あいつ等を捕らえれば”丞相”の位を約束されてたんだろっが。」と慎二が質問した。

「最初はその積もりだったが、先生と呼ばれたときに・・・・な。其れに・・・・独り身な私にとって家族とは甘美な響きなのだよ。」
と葛木は淡々と答えた。

「そうかよ。」と慎二が溜息を吐き捨てる頃には辺り一面静に、地面は血溜まりになっていた。

董卓一行が援軍を得て虎牢関に入った時……ついに袁紹は動き出す。目標は虎牢関！！

その作戦名は……！！！！

ハ雄雄しく、勇ましく、華麗に進軍

軍師を見事に愚弄する策であった。

危機（後書き）

次回は土曜日辺りです。よろしくっす

外伝・転生伝（前書き）

萌将伝なるものが出るといっわけ書いてみた。次回作予定のもの
です。

外伝：転生伝

戦国の乱世に暴虐の欲しい俤にした魔王がいた。

名を

董卓……!!

「バ……バブ……!!」

(なぜ……恋姫の世界に居るんだ……!!)
—————

恋姫の世界で董卓の名を付けられた少年シバハラ 司馬原焰ホムラ

それでも……

成長し青年となった彼、董卓 字を仲穎 真名を焰はしっかりと……

「貴君らよ!! 相手は賊! そう、害を持つ虫けらだ!! そんな中我らは誇りある、気高き、悪の魂を持つ精鋭なり!!! さあ、叫べ!!!」魔王襲来」と!!!」

「「「「「「魔王襲来!!!」」」」」」

魔王人生満喫をしていた。

この天下に跋扈する悪を根絶やしにするため！！自ら悪に成らんと
！そして、現世で魔王とも未来では賢君と呼ばれる為に！！ここに
出来た夢へ全捨全救・全てを捨て、全てを救うを實現させる為！！

そして、自らをく大乱の梟雄と名乗っていた。

だが。彼の頑張った結果……

「ほう？貴殿がく外暴内賢：外からは暴君と呼ばれているが知る人
からは賢君と呼ばれている故につけられたあだ名への、魔王董卓殿
か。我が名は常山の昇竜・趙子龍。貴殿の悪道は、私にとって正義
ならんと感じた！故に貴殿に御味方いたす！！」

「私の名前は魏延！字を文長！！真名を焰耶！！！！ぜひ、仲間にし
てください！」

「オーーーーーーッ ホッホッホッホ！！皆さん！！生意気な董
何とかさんを倒しなさい！！それも、優雅に美しく華麗に。で
すわーーーー！！」

なぜか右斜めを一直線に進んでしまったのであった。

それでも道が続く。

たとえば、天から見捨てられようとも前進し続ける！！

「今こそ攻め時！！我が霸道にして悪道が天を統べる時！！さあ、兵たちよ。今こそ駆け抜けよ。命を惜しみ、名を欲せよ！！生きた者たちには、我が夢を見せてやろう！！いざ行かん！！我が？遙か気高き悪の道？」

某征服王な戦車に乗って戦場を駆ける魔王・董卓と後ろに続く仲間たち。

彼らの征服戦争がここに始まる！！

真・恋姫＋無双 “転生伝” 魔王征服記

外伝・転生伝（後書き）

書いてみました。他にもく統一王：司馬炎・小霸王の双子の弟：孫
皎・隴西の豪傑：王双等を考えています。何か意見・このキャラが
いいなんかあったら感想に書いておいてください。考えてみます。

思い(前書き)

秋葉原行ってきて遅れました。しかし、”Betrayers”と
”とらいあんぐるハート3”の入手に成功。結果良しですね。

その上、袁紹・袁術の両方はこの戦いで手柄を立てていて他の群雄諸侯にも、大きな鼓舞になっていたのだった。〔袁紹はシ水関攻略・袁術は董承派の支援による首都攻略〕

・・・が。

「これが”窮鼠猫を噛む”にならなければ良いんだけどなー。」と愚痴を零すのは袁術の客将、孫策であった。何せ、関には董卓は居るだろうが、大陸にその名を轟かした董卓軍の猛将達がいる。

数で勝っていてもこの戦は恐らく・・・五分五分。

「それに〜。いや〜な”予感”がするしな〜。」と、さっきから寒気が止まらない孫策。

まるで・・・死の予感。

「愛紗ちゃん。」と愛しき義妹の名を小さく洩らす劉備。

医者からの診断の結果はどれも「生きているのが不思議だ」と言われる者であった。

偶々居た名医華陀のお陰で一命は取り留めたものの、その華陀からは「もう自力で歩くことは出来ない。ましてや馬に乗ることなど言語道断。」と言われてしまうほどであった。

その関羽も今その診断結果を聞かされて塞込んでいた。

陣の士気は他陣に比べてすごぶる悪く、諸葛亮・鳳統の両軍師の采配で何とか保っている状態であった。

「私……もうヤダヨ……みんな死んじゃうの……」と劉備は一人闇を抱えて悩んでいた。

無理もない。

だが……ここで諦めないのが、”英雄”なのだろう。

決戦当日。

虎牢関に向かう先鋒の中に緑色の旗が、風に揺れていた。

その陣には……闇を宿しながらも、必死に理想を守ろうとするハ覇気^ハを宿した劉備の姿があった……

side董卓軍

無事に徐栄・李儒の軍勢と合流し遅れてきた、葛木・慎二と共に虎牢関に入場した董卓等は作戦会議を行っていた。

降伏案も出ていたが……月自体が決戦を申し出たのであった。

因みだが……彼の従姉で徐晃 字は公明、真名は大河なる女傑がいたりする。

長安の守将でありその実力は呂布に勝るとも劣らないほどののだが、五胡対策のため長安にいる。また本編には関わらないので割愛する。

「みなさん。」と将達に月は、

「私那不甲斐無い所為でこんなことになってしまい、すいませんでした。」と謝罪した。

だが、決して諦めた気持ちになっていたのでなく。

「しかし、未来に生きる人々の為にもどうか力を貸してください。」

ただ、皆の勝利と無事を願うシスター（修道女）。

その祈る姿はまさしく、聖女であった。

「ふん。なにを言うかと思えば。そんなの当たり前だろ？お前はただ命令すればいいんだよ。それにこの戦いで勝ちさえすれば朝廷の権威はみな僕のものになるんだからな！精々頑張れよ、み・な・さん？アーアーッハッハッわぎやめ！！」「騒がしいぞ、真唐。」とバカ笑いした慎二に裏拳を炸裂させる葛木。

「だれよ。あのわかめを將軍にしたバカは。」と溜息をつく桜凜。

一瞬ドキッとした土郎。まさか自分が推薦した、とは言えず溜息を吐くしかなかった。

「桜凜ちがう。わかめ食べ物。食べ物バカにしちゃだめ。」と変わった指摘をする恋。その後ろで床に膝を付き恋の突っ込みを爆笑する聖羽とねね。

やれやれ。という感じで酒を飲む小次郎と霞に、横で武器を磨く羽賛と蘭とさっきの雰囲気は何処にやったと言わんばかりにグダグダとなり、そのまま酒宴となった董卓軍であった。

関の一角で満月を見つめる馬嵯禍ことへラクレス。

その心には、

「イリヤよ——お前を守れなかった——私を許してくれ——」

守れなかった主への謝罪。

そして……

「されど——イリヤ——お前みたいな悲劇を出さぬためにも——どうか見守ってほしい——」

この楽しき宴が続くようにと亡き主に願う祈りであった。

ふと……

「任せなさい、バーサーカー。何せったって私は、バーサーカーのマスターだもん。その代り……レディーを泣かせちゃ、だめよ。」
と亡き主の声が風と共に聞こえてきたように感じた。

「——ッフ——承知した——その言葉——必ず——」

時は曙。旭日が舞い上がり、両軍を照らす。

連合軍、董卓軍共に決戦の火蓋が切って下ろされ様としていた。

大切なものを守るうとする者・・・

それすら奪う者・・・

それを礎に覇道を行く者・・・

名声を得て跳躍しようとする者

力を得て土地を取り戻そうとする者

主の為敵を薙ぎ払わんとする者

それぞれの思いは交差し合い・・・要害 虎牢関 で激突する!!!

少し短いですがいかがでしょうか。楽しんでいただけただけでしょうか。

それはさておき昨日（レッドクリフ1、2）を見て泣いていた自分です。故に、テレビCM風に最終回をダイジェストにお送りします。

次回・・・

魔王は聖女のように祈り・・・

令嬢は勝利に酔い痴れる……

要害の地にて、決戦となる!!!

涙の向こうへ

「我ら姉妹に挑むのか!」「まあいずれは越えねばならぬ敵。行くぞ!矢と気合の貯蔵は十分か?」「ほざけー!」

呼吸の合う魏武の姉妹に挑む、堅守の戦士。

また光が射すから

「おおおおおおおおお!」

唯、守るため。賊に生きた義勇の将が矢嵐の中、突貫する。

大河の流れに

「蓮華・・・あとを・・・任せる・・・わ・・・」
「せ、雪蓮――――」

小霸王死して、美周郎は叫ぶ。

この魂こゝろをあずけて

「全軍！！突撃！！」「おおおおおおおおおおお！！！！！！」
「！！！！」

碧眼の王、巨人の方へ兵と共に怒涛の突撃。答えるように究極の剣技の構えを取る巨人。

水に舞つ月のように

「いくぞ！！」「来るがいい。女将よ。」

一撃必殺の構えを取る竜。流麗三撃の構えを取る侍。

たとえすべてが夢でも

「いくよ！みんな――！！」

理想の為・愛しき義妹の為、剣を鮮血に染め上げる善徳の王。

遙かな道へ生きてゆこう

「「おおおおおおおおおお！！」」「

両軍、大激突！！

漆黒の狂戦士と薄幸の魔王 決戦
出来上がり次第上映。

ドストドストドス！！

「

——！！！！！！」

巨大な杭が何本も刺さる漆黒の狂戦士。

「クレスさーーん！！」

唯見守ることしか出来ない力なき薄幸の魔王。

その結末は・・・いかに！！

お楽しみにー！ー！ー！

思い（後書き）

最後の予告・・・かなり力を掛けて作ってみました。どうか
感想待っています。

決戦<死線>（前書き）

短めですいません。また、予告で出した<杭>ですが、袁紹が用意したものです。さらに言えば・・・北欧の神話を見て来て下さい。とある 殺しの概念を持つ があります。

馬嵯禍も敵・孫策軍に衝突・・・字の如く孫策軍が空に舞い上がるのだった。

次々と蹂躪される・・・そんな中・・・一騎・・・孫策が巨人に向かっていた。

ある一種の賭け・・・自分にもしものことがあっても妹の孫権がいる。其れを踏まえて巨人に挑みかかったのであった・・・それが滅亡の合図とも知れずに。

「はあああ！！」と馬嵯禍に剣を振るうも最小限の動きでかわされてしまい、逆に

と巨剣を頭に落され様としていた・・・しかし

”事、成れり”

巨剣を上手く逸らし、有ろう事かその巨剣の上に飛び乗ったのである。

驚いた馬嵯禍は少し動けなかった・・・その刹那

ザシュツ！！

馬嵯禍の首に切られ・・・そこからどす黒い血が舞い上がった。

これこそ孫策、捨て身の策であった。

これにより巨人は地に落ちた。

其の瞬間・・・連合より大きな歓声が上がった。

<side周瑜>

「ふう。どうにかなったか。」

一つの賭け。雪蓮からの提案の中でもこれほどバカげた物はないだ
る。だがこれで、我が軍の名は上がり袁術から独立への一歩にな

「っえ？」

なん・・・だと！！！！

side end

巨人は立ち上がった。

首に傷跡すら残っていなかった。

静まり返る戦場。敵はおろか味方すら開いた口が塞がらないことが
起きた。死者が蘇ったのだ。

「っ！そっ！そっ！そっ！そういえば？確か伝説の中に・・・」ふと月は思い出した。

そう、確か” 曰く、命がけの試練、十二関門も突破し十二の命を与えられた者” と紹介されていた。つまり・・・まだ、生きているのだと

だが、孫策にとっては最悪其の物だった。しかし、今は味方と合流しよう。そう考えた矢先・・・脇腹に衝撃が来たのだった。目に見えるのは無骨な巨剣。

ああ、これが

そう思った瞬間・・・空を舞った孫策。向かうは幸いにも自軍の陣・・・しかし着地点は最悪にも柵であった。涼州は騎馬民族の国。故に対策として作つといた馬返し付きの馬防柵であった。

兵たちも気づき君主の壁になろうとしたが・・・

グサツツツツ！！！！

音が・・・鮮血が舞った

陣からは悲鳴が聞こえた。孫策の胸に柵が刺さっており、ただ見ても助からない・・・悟る他無かった。

「姉上！！」「雪蓮！！！！」血達磨になった孫策に近寄った。しかし、孫策はまともに喋ることすら出来なくなっていた。

「間違えた。あれに手を出すべきではなかったか。」そう孫策は懺悔していた。そして、最後に力を振り絞り、

「蓮華……あとを……任せる……わ……冥琳も……蓮……ふ……おね……い……」そこまで伝えると……孫策の目から生気が、光が消え手が地に落ちたのだった。

「あ……姉上……！！」「せ、雪蓮……！！」
二人の悲鳴が戦場を支配した。

その二人を見つめる馬嵯禍。やはり女子の悲鳴は乾いた心に響くのだろう。だが剣を構えなければならない。孫策の兵達が顔を歪ませ泣きながら殺気立っていたのだから。

すると、孫権は孫策の剣<南海霸王>を持つと兵達に激を飛ばした。

「聞け！！孫の将兵よ！！我が仲間よ！！今、我らが王は天へと召された！！だが、ここで勝たねば王に申し訳が立たぬ！！孫の将兵よ！！我が仲間よ！！今こそ天に叫べ！！今こそ天に願え！！その声と願いを聞き我は今、修羅とならん！！王はかの巨人を殺して見せた！ならば今度、我らで何度も何度も

命乞いするまで殺して見せようぞ！！全軍突撃！！」

オオオオオオオオオオオオ！！！！！！

孫権の号令と共に兵達が雄叫びをあげ、巨人に向かって突撃をして

いく。

悲しみの怒号程、哀れなものはない。だが、その暴力は他に比べれば月と蠶。唯の虐殺劇になろう。しかし、比べ物にもならない暴力を個に持つ怪物がいることを忘れてはならない。

巨人・馬嵯禍は剣を構えた。其の構えは・・・かの不死の毒龍”ヒユドラ”を一瞬に葬った弓にして究極の剣技。装填するは自らの魂を四つ。狙いは突撃する兵達くつわものたち。人々よ、見よ！大戦士の妙技を！！

「射殺すニン 百頭ライブズ」

豪！！！！

その音から一筋の光が見え、さらに四つに分かれ・・・・・・・・孫

権軍を蹂躪して行った。

決戦<死線>（後書き）

短めですが、一番書きたいところがかけてよかったです。次はG
W以降に成るかも知れませんが、また、会いましょう。

決戦<死練>(前書き)

書いてみました。どうぞ。

決戦<死練>

<side 黄蓋>

いかん!!!

あれは……何が違う。うまく言葉で言えぬが……唯判るのは、権殿が危ないことじゃ!!!

思えば策殿を守れなかった、ワシが言うのもなんじゃが……せめてもの……権殿だけでも守ろう!!!

そう思つて、権殿の腕を掴みそのまま……後ろへと放り投げた。

幸い、後ろには思春と明命が受け止め……落馬してくれたのだった。安堵したのは、つかの間……振り向くと四刃の光のうちの一刀が……わしに迫っていた。

多くの若者たちを巻き込んでしまったのは、ワシ自身の未熟さゆえか……か……?

だか堅殿……策殿……江東の希望の光は……守りましたぞ……
・冥琳……権殿と江東の未来を託すぞ!!!

・そう願うとワシの体は……光に飲み込まれ……意識……が……

side end

「うく……」孫権は少し打った体に鞭打つ、立ち上がり……目眩がした。

辺りを見渡す限り……血の海が広がっていた。

これが……我が同士達の……果て……なのか。

そこで見つけてしまった……一本の腕……その手には、弓が握られていた。

見間違っはすが無い……あれは、黄蓋……祭の……ゆ……見……い……。

「あ……あ……あああああ……あああああ……あああああ……！祭！祭！！さいいい……！！」気がつけば……悲鳴を上げ、泣いたのであった。

所変わって、この戦場は劉備軍。相手は小次郎・羽賛の二人組み。

そんな場所で……竜と侍は舞を……

「っじゃっつ！」「っしっつ！！」一騎打ちをしていた。

竜が槍で突き刺せば、侍が少し体を横にずらし……その隙を剣にて横に一闪、それを竜が防ぎ再び槍を繰り出す……その繰り返しで

あつた。

「ふむ。見事よ、槍使い。まだ舞っていたいが、これで終幕と以降ではないか。」と小次郎が宣言する。

「ほう。そうか、私もそう考えていたところだが、實力は共に五分。私を倒せる秘策でも？」そう趙雲が問いかけると、小次郎は唯、構えた。

背は趙雲に向け顔だけが左肩越しに向けられ、刀は目と水平に構えられている。

一見隙だらけにしか見えない構えだが、その実一分の隙も見せてはいない。

それを証明するように、趙雲が槍を構えた。それも、先ほどとは違い必殺の構えであつた。

辺りの空気が急速に冷たくなる。小次郎の極限まで凝縮された、切っ先のように鋭利な殺気が、首にヒタリと突きつけられる錯覚を趙雲は感じた。

「秘剣

」

小次郎が踏み込む。趙雲もそれに合わせ槍を突き出す。先ほどとは違い……音速を超えるほどの突きを!!!

だが

「 燕返し」

烈風が吹く。今までのどんな一太刀よりも速いそれは、烈風と呼ぶ他はなかった。風の質はそのままに稲妻の如き速さが加わったこれは、風雷と呼んでもいいかもしれない。

風雷は上段から真つ直ぐに落下する。その余りの速さに、驚愕の表情を浮かべることすら出来ない趙雲。そんな余分を含んだ瞬間、体が左右対称に割れてしまう。

故に表情はそのままに。落ちる風雷を見据えて、趙雲は迎撃に打つて出る！

「 ハッ！」

ギン！！、と音が響いて、趙雲は風雷を防いだ。人が 盟友・関羽ですら出すことの難しいだろう速度の一太刀を防げたことに、趙雲は内心を喜びに染めた。

あれほどの太刀を放ち、あまつさえ防がれたのだから、小次郎にはこれ以上無い隙が生じているはず。

趙雲はそう思い、刃を返そうとして

瞬間、二つの風雷がその身を裂いていた。

それは、趙雲の視界にどう映っただろうか。上段からの風雷を防いだ瞬間、どこからともなく二つの風雷が現れた光景が。……否、恐らく理解は及ばなかっただろう。僅かに喜びに染まったままの表情が、それを物語っていた。

……何だ、今のは

「避けられなんだか。如何に竜の如くとはいえ所詮は人、燕には遠く及ばなかったということかな？」

趙雲はたった今、わかった。自分は斬られたのだと……

「……何を呆けた顔をしているのだ？ いや、そのような表情も花があつていいが、少々品に欠けると思うぞ」

「下らん……事……言うな……それよりも……今……何をした……貴……様……！」

それだけ言い、趙雲は強い殺気を込めて、小次郎を睨んだ。答えねば殺す、と視線にも言葉を乗せて。だがその先にいる柳のような侍は、やはり殺気をもの見事に受け流して口を開いた。

「何、そう大した芸ではあるまい。偶さか燕を切ろうと思いつき、身に付いただけのものであるからな」

「燕………だと？」

さっきまでの殺気を消し、自分を斬った妙技の種明かしを聞いた。

「燕、という鳥はな。風を感じて飛ぶ方向を自由に変える鳥だ。故に、大気を通らねば振れぬ刀で奴らを断つのは不可能よ。連中にとって速い遅いの区別は無い。更に太刀など所詮一本線に過ぎぬ。八方に方向を変えられる燕を断つことが出来ぬは道理よな」

唐竹（切り落とし）の線をなぞり終えた小次郎は、次に別の線をなぞり始める。軌道は逆袈裟。右側の首元から左脇下を両断するような軌道だ。そして、自分を斬った技の種明かしも、同時に進んでいく。

「どうしたものかと学の無い頭で考え、私は一つの結論に達した。一つで足らぬのならば増やせばいい、とな。

一つ目の太刀で燕を追い込み、二つ目の太刀で逃げ場を無くし、三つ目の太刀で断ち切る。だが知っての通り連中は素早い、加えて

この長刀だ。真にそれを成すのならば一息の内、ほぼ同時に放たねばならぬのだが、それはもはや人の身で行える業ではない。叶うことなど有り得ぬと承知していたが

二つ目をなぞり切り言葉を区切ると、三つ目の線を示し始めた。最後の軌道は逆胴。左から右に胴を両断する線。種が割れるのは近い。

「生憎と、他にやりたいことが無かったものでな。一念天に通ずと言つ言葉の通り、只管に剣を振ってきた結果は、下らぬ思い付きを必殺の剣に昇華してくれたという訳だ。」

故に、秘剣・燕返し。三つの太刀を同時に放ち敵を確実に四散させる、我が唯一にして究極の必殺剣よ」

種が割れるのと、三つ目の線をなぞり終えるのは同時だった。小次郎が示した、その技の正体と同じように。

ハッ

知らず、趙雲は内心で苦笑を洩らした。

つまりこの男は、ただ只管に修練を積んだだけで『三太刀同時攻撃』なんていう絶技を身に付けたのか。

「ならば……私の奥義を……お見せしよう。」

昔、見た夢。

ゴツゴツした道の上で戦っていた男女。男は槍で女の胸を・女は光の玉で男を肩から抉った二つの技。忘れられず、只管に訓練し編み出した二つの技をあわせた絶技を！！！！！！

趙雲は構えた・・・小次郎も再び構えた。

二人の周りは静かになった。

動いたのは・・・小次郎！！！！

「燕返し」

再び三つの剣撃が趙雲を襲う。

「後より出でて先に (竜爪) 」

その刹那・・・趙雲の槍は

「突き穿つ槍撃 (返刃) 」

小次郎の胸を穿っていた。

決戦<死練>(後書き)

とりあえず読み方は”竜爪返刃・りゅうそうへんじん”と読んでいます。このキャラにこの技を・この台詞を、と思える人は感想に書いてください。

決戦<死退>(前書き)

夜ごろに新しい長編を投稿する予定です。それではどうぞ。

決戦<死退>

<side 小次郎>

なん……だ！

きつと……他の者が見たら我が秘剣を無効化した様に見えるだろう。が、

「一度見ただけで……我が秘剣の三撃の交差点を……つくとわ。」

「つぶ。なに、完全には防ぎきれなかったぞ。見ろ？華の乙女の体をこんなに斬り付けおつて。」

つくつくつく……真に……良き武人だな。

「我が名は李稚然。真名を小次郎だ。貴殿は？」

「我が名は趙子竜。真名は星だ、小次郎殿。」

そうか……

「その身……天へ飛翔する竜が如く……されどその名は……夜天を彩る星輝……か？」

「ほほう。これはこれは？強烈な告白ですな。」

「ふ、それよりも私に構い過ぎると」ぎゃー……！

！陣が落ちるぞ？」

「な!!!??？」

慌てる星……なんとも可愛げがあるな……

「ゆけ……」

「なんですと??？」

「もはやこの傷……心の臓器に達している……何より……私を負かしたのだ……試合に勝って勝負に負けたら……私が許さんぞ……」

……しばらくして星は陣へと戻って行った。

「しかし……ッグ！」

ついに膝を折ってしまった……

「……月よ……すまぬ……な……巨人よ……
月を……ガハッ……皆を……たの……」

ここに……侍は倒れた……唯その顔は……微笑みを浮かべていたのだった。

場所変わって・・・孫権達は・・・往生していた。

原因は言わずと知れた巨人・・・姉の・・・祭の敵であるのだが・・・

「はっ!!!」「へあー!!!」「せいっ!!!」

蓮華・思春・明命の三人がかりで挑んでいるというのに・・・

「

」

まったくをもって・・・相手に出来ないほど・・・

「がつ!!!」「はっう」「つく!!!」

圧倒的な力の差で負けていた。

幸いにも思春の御陰で左手を切断、明命は右手を刈り取り剣を落させ、蓮華は思いと憎悪を籠めた一撃で・・・胸板を貫くことができたが、

「

」

巨人は咆哮と共に傷を塞ぎ、腕を再生されたのである。化け物過ぎている!!!

再生後・・・まったく攻撃が通らず、逆に攻撃され逃げていた。

明命は・・・剣を半ば折れており戦闘不能

思春は・・・体中傷だらけで、尚も蓮華を守っていた

蓮華は・・・最早精神が参っており足が重くなっていた

ついに三人とも力尽きて倒れこんでしまった。近くにあるのは・・・
斬り裂かれた同士たちの骸だけだった。

「
┌──────────────────┐
└──────────────────┘

巨人は何も言わず・・・唯剣を・・・向けた。死刑宣告であった。

三人は・・・武器をとり構えた。

何もしないなら・・・壮絶に戦い向く・・・そう・・・三人の心
が合わさった時。

「蓮華様!!」

そこに現れたのは・・・孫呉最後の柱石。周公勤であった。

> s i d e 冥琳 <

覚悟が決まった。

濟まない雪蓮・・・祭殿・・・

「蓮華様・・・江東まで退却します。殿はわたしがやります。」

「…………え？…………何を言ってるの冥り」「ごめん！…………つか…………」

「冥琳様…………何するんですか！」

と蓮華様に当身を喰らわせ気絶させ、明命と思春も兵達が確保し担いでいた。

「時間を稼ぐ…………それだけだ。蓮華様を頼む。きつと怒って、悲しむだろうな。皆で、支えてやってくれ。」

「「冥琳様！！」」

「連れて行け。大丈夫よ。私たちは、これから頑張るから。」

そう二人に伝えると蓮華様と一緒に引かせた…………

「さて…………待たせたな。」

そついうと私たち百の兵達は剣を構えた。

其れに応える応えるように剣を構える最大の難敵。

「ご覧の通り、貴様が挑むのは孫呉の精鋭。生死の極地！！行く

ぞー！恐れずしてかかってこい！！」

と巨人に・兵達に・何より自分自身に活を入れ・・・・・・・・躍りか
った。

「いくぞ皆の者 一人一殺だ！！」

「「「「「オオオオオオオオ！！！！」」」」」

「
」

・・・・この戦いは・・・・自分のような未熟者では文字にするこ
となどおこがましい・・・・言えることは一つ・・・・血湖の上に伏
している人の中に・・・・漆黒の長髪を血化粧で染めた・・美女が一
人いたこと。何より・・・・その顔は、満足そうな笑顔であった。何
かを成しとけだ様な・・・・死顔であったのだった。

決戦<死退>(後書き)

どうぞでしょうか。感想待ってます。

決戦<死闘>(前書き)

頑張っていくぜー！ー！！

決戦<死闘>

そこは暴風雨。

紫の風が疾風となって、敵を斬り裂く。

白銀の風が突風となって、敵を薙ぎ飛ばす。

紫の疾風は、張遼。白銀の突風は華雄。

「どないしたんや袁術軍。名家とは名ばかりか!」と張遼が一気に敵を五人ほど斬り通る。

「どうした!!!この私に挑むものはいないのか!!!」と華雄が戦斧を振り回し威嚇する。

まさに<血の暴風雨>

張遼隊が突きこみ、そこに華雄隊が力で敵を裂き、そしてひたすら前へと進む。

そこにあるのはただ恐怖と、怒号と、怨嗟とそして彼女達を通った証としての蹂躪の犠牲者たち。

袁術は何をしていたというと.....

すでに戦場から逃げていた・・・部下を見捨てて。

五万の兵の主は孫策が死んだと聞くや、

「な・・・！七乃！最早駄目なのじゃ！早く！早く妾達は国に避難するのじゃ！」

「はい〜 いますぐに〜」

と呑気な声と共に消え去っていたのだ。

さらに追い打ちを掛けるが如く

「

」の

怒号と共に馬嗟禍く暴風くが現れた。

最早袁術軍は誰一人として戦う意思を持たず、殿の将紀霊の降伏と共に武器を捨てたのだった。

「グハ!!」

の声と共に倒れたのは<錦>の馬超。

その横には、気絶した馬岱。そして……<司徒>王允。

熟練した無音足で、近づき馬岱・馬超に暗殺技<蛇>にて気絶させ、混乱する涼州連合に

「……本国に退け……さもなくば……」という二人に短剣を投げようとする。

「つく。分かった……全部隊につげ!!涼州連合は反董卓連合から脱退する!!……これでいいか?」と女将・韓遂は王允を睨みながらいった。

「問題ない。いけ。」

「ああ。」

……こうして、涼州連合は何もすることなく引いて行った。だが、未来の涼州連合の長をなくさずに済んだのは、良好なのかもしれない。

曹操軍は・・・

「つち。ええい、守ってないで戦わないか!!」

「断る。好き好んで猪と殺し合いたくない。」

「ちょ、何言つてヤガりますかバカ野郎!! さつさと殺して、僕をたす・・・ウワ!! イキナリ来るな。死んじゃうかとおもったじゃないか!!」

「いや、あんさん。ここ戦場やで。命のやり合いでっせ?」

「そ、そのなの。でも、弱いくせにしぶといの。」

「どうかんだ。・・・猛虎蹴撃!!」

「ぎゃーーーーー!!」

「ふう。慎二、取敢えず邪魔だ。」

「・・・こいつ、本当に援軍・・・なのか? 言うては何だが・・・私よりバカっぽいぞ?」

「（自覚はあったのか・・・姉者）」

と、戦(?)っていた。

「つく。ちくしょーーーー!。寄ってたかって・・・僕を袋にするな

「……！！……こうなったら……あのデカ物の援護に行ってくる。
……やい、その三馬烏！！悔しかったら僕を追いかけく
るといい。ア……ハッハッハッハッ！！ツドウア！」

「……誰が三馬烏だ！（や！）（なの！）」

スツタラコツサツサツ

「………済まないな」「」

とひゅくと風が吹いたとき。

「さて……行くぞ。」と目を細め、獲物を握る徐栄。

迎え撃つは曹武の要

「我ら姉妹に挑むのか！！」

夏侯淳・夏侯淵の姉妹

「ふん。幾たびの戦場にて五胡と戦い、未だ不敗。そちらこそ、戦
つて来たのはたかだか盗賊と農民だけだろうが。舐めるなよ、小娘」
と挑発する徐栄。

「ほざけ……！！」と挑発に乗る夏侯淳……だが

「……ふん。おまえの勝手だが」

と一度言葉を区切り、首を左に傾け

「その前に左に避ける。」

と言った瞬間

グサ!!

と夏侯淳……彼女の左目に矢が突き刺さっていた。

「ぐっ、ぐああああああっ!!!!」

「姉者あ————!!!!責様!徐栄!!」

「私は避けたと言ったがね?さて、その首・貫い受」「ぐあああ
あああああああ!!!!」「何!!!?!」

「姉者っ!!」

ぶしゅっ!!!!

夏侯淳は心からの叫び、そして渾身の力と気合で左目に刺さった矢を自分の目ごと抜き放つ、噴出す血潮、しかし夏侯淳は

「天よ！地よ！そして兵士達よ！よく聞けえい！我が精は父から、我が血は母よりいただいたもの！そしてこの五体と魂、今は全て曹孟徳のもの。断り無く捨てるわけにも失うわけにもいかぬ！！我が左の眼、永久に我と共にありい！！！！」

そう言い放つと夏侯淳は抜き放たれた自らの左目の眼球飲み干す、その苛烈なまでの夏侯淳の姿に誰も動けない、時間が止まったかのようなその場所でただ一人夏侯淳だけが自らの愛刀七星餓狼を構え直し、呆然として立ち尽くす自らの妹、夏侯淵に

「大事無い、取り乱すな秋蘭、わたしがこうして立つ限り 戦線は崩れせん！」

そう言うとニヤリと笑いかける、その声にようやく我を取り戻した夏侯淵は

「あ、姉者、せ、せめて左目の手当てを！」

そう言うと自らの服を破り震える手で夏侯淳の左目に包帯のようにまいていく、しかしその布もすぐ血で赤く染まる

「ありがとう秋蘭、それと徐栄！貴様には誇りがないのか！」
と徐栄を罵るが、その徐栄は涼しい顔で

「ああ、生憎誇りなどない身だからな。だがそれがどうした。将としての名が汚れる？は、笑わせないでくれよ夏侯淳。汚れなど成果で洗い流せる。そんな余分な誇りなぞ、そこらにいる狗にでも食わせてしまえ」と言つてのけた。

「何だと貴様！！」

「誇りなんぞで救えた命がどれだけ散つて行つたか・・・貴様に分かるまい！！ああ、確かにいくらかの誇りを持って人間を救つてきたさ。自分に出来る範囲で多くの理想を叶えてきたさ。遠い昔から憧れていた將軍という地位にさえ、ついにはたどり着けた。」と徐栄は二刀を夏侯淳の頭上へと落したが、其れを難なく夏侯淳は防いだ。だが、徐栄の声は続く。

「だがしかし、現実はずつた。主の意志で送り出され、助けたいと思つた人達の亡骸の上に更に死体を重ねて解決を図る。そこに俺自身の意思はない。唯・・・主の駒となつて働く人形の姿がそこにはあつた・・・そうだ。それは違う。俺が望んだ物はそんな事ではなかつた。俺はそんな物のために将になつたのではない・・・」

「！！！」

まだ、漢王朝の將に生り立てだった徐栄は、繰り返される人間の醜さと己の愚かさの果てに絶望していた。

「そんな中・・・月が・・・董仲穎がこの俺にこういつたのさ。＜違います・・・間違い、なんかじゃない・・・！決して間違いなんかじゃ有りません！！確かに、人は愚かかもしれない・・・でも、あなたはそれでも人を救おうとした。救えない人は沢山いたのかも知れない。でもあなたが救った人は其れによりも沢山いるかも知れない。絶望してはいけません。希望を持ちましょう。私たちと共に多くの人達を救いましょう！！＞・・・思えば強烈な告白かも知れない。だが、私は月の言葉で救われたのだ！！故に！！」とここで夏侯淳の腹を蹴り飛ばし、お互い距離をとった。

「貴様等を倒し、この戦を終結させる！」

と、徐栄は吠え再び夏侯淳に切り込むが・・・

「・・・るな・・・ふざけるな！！」と夏侯淳は逆に徐栄に斬りかかった。

「貴様の言い分は分かった！確かに私も何度も思った！だが！！私の双肩には華琳様の愛と希望と夢と未来と愛とその他もろもろがかかっているのだ！！貴様に譲れぬ物があるように私にも譲れぬ物がある。故に貴様に我が左目をくれてやる！代わりに貴様の背負った想いと命をもらい受ける。ハアアアアアア」

大剣と双剣の舞いは嵐（言葉）から少し緩やかになるも雨脚（剣戟）は強くなる一方だった。

「オオオオオオオ!!」「セリヤーーーーー!!」

何度も、何度もぶつかり合う二人に、夏侯淵は手出しも出来ない。

だが……ここで

「っ……そこまでだ。消える!!」

一瞬寒気が走った徐栄は、夏侯淳の裂帛の気合の籠った大剣を打ち据えた。

が、夏侯淳は徐栄の持つ剣<赤原>を叩き折り、そのまま両断する勢いで斬りかかった。

徐栄も、残された全ての力を込めて残ったもう一つの剣<赤鉄>を振るう。

二つの影が交差し……一つになった。

徐栄の剣が切ったのは空気だった。

夏侯淳の大剣は、徐栄の左胸を貫いて背中まで抜けている。

「姉者!!」

無事に勝った姉を気遣おうとしたが今この場に入るのは、無粋以外の何物でもない。夏侯淵は思った。

「……は、私の勝ちだな。徐栄よ」

「……ああ、そして私の敗北だ。見事よ、夏侯淳」

徐栄にとって初めての敗北……彼の無敗はここに終わった。

決戦<死闘>（後書き）

徐栄はまだ死なない予定。因みに周瑜さんは・・・孫策さんと黄蓋さんの三人で孫権達の行く末を見守っています。

決戦<死想>(前書き)

スランプ引きずってサンジョー!!
頑張ります。

決戦<死想>

「さて、徐栄。あなた降る気ないかしら？」

と、徐栄に声を掛けたのは小さき霸王こと曹孟徳であった。

「ほう、自分の所の将を傷物にしたのに勧誘かね？見上げた根性だね。」と徐栄は皮肉ったが逆に、

「そうよ。あなたの人間という人間を徹底的に否定させ、家畜以下にして唯の人形にして働いてもらうだけよ。」と、唯では死なせない・殺さないという思いをぶつけながら言い放った。

「か、華琳様〜。」と一人喜んでいるが・・・

「悪いが断ろう。自分にも思い人がいるのでな、まだ男をなくしたくはない。」

「あっそ。ならとつと行きなさい。」と曹操は、破棄捨てて行っ

た。

徐栄が不思議そうな顔をしていると、

「因みに、李カク・郭シは死んだから、劉備軍はガラ空きよ」と言い残し部下を連れて陣払いの用意をし始めたのだった。

畏かと思っただがどうやら形勢不利を悟って自領に帰るらしいので面倒事を避けるつもりらしい。

「ああ、分かった。情報感謝する。」という徐栄は誰も乗っていない軍馬に乗って月達のいる本陣に向かったのだった。

Side 曹操

「か、華琳様！？なぜ帰る準備を？」と春蘭が尋ねてきた。

「唯でさえあの巨人と競える彼方が負傷した今、勝ち目が無いからよ。」

まったく、あの男。次であつたらその思い人とやらを目の前で犯してやるうかしら。

「そ、そんな華琳様！わたしはまだ」駄目よそれに。」

春蘭が何か言う前に頬に手を添え、目を凝視した。

「あなたをこれ以上彼方を無駄に傷つけないからよ」

周蘭にこれ以上の傷があれば我が覇道は潰え、私や秋蘭に深い傷を与えてしまう。

「む。分かりました。」と春蘭はとぼとぼと医者の下へ行つた。

そして私は、激戦地・虎牢関を人睨みして

「この代償は高く付くわよ。覚えておきなさい・・・董卓！」

と脳髄に刻み自領に帰るのだった。

side終

白き仮面をつけた将、郭シは死の淵にいるのが分かった。

劉備を抹殺することを、あと少しで成しえたのに、感のいい燕人・張飛に邪魔されたのであった。

が、その張飛も傷つき倒れていたのだった。やはり、痺れ薬を塗った短刀が数十本も刺さったのが要因だな。

「い・・・行かせないのだ・・・あ・愛紗の代わりに・・・鈴々が・・・うつ・・・桃香おねーちゃんを・・・守るのだ・・・」

と、生まれたての馬の如くふらふらと、されど立てば修羅の如くな将、張飛に再び短刀を投げようとして、胸が熱くなったのだった。

見れば自分の胸に槍が貫いていたのだった。

つく、この槍は趙雲とかいう女の持っていたもの・・・つまりその女がいるということは、小次郎は敗れたか・・・惜しい将を亡くしたな。

った。

side終

side関羽

「愛紗ちゃん！愛紗ちゃん！！」
桃香様、旅立つ不幸をお許しく下さい。

「愛紗！しっかりするのだ！！」
鈴々、あまり桃香様を困らせないでくれよ。

「つく、愛紗！！」
星、皆を軍師たちの事も頼んだぞ。

つむ、雪か。そういえば冬だったか。

はは、まるで私を癒してくれているのかな。

だが、私も出来ることをやれた・・・少し不満だが、あの白仮面の男も倒せたし後は董卓を討って手柄をあげれば、桃香様の天下に近づくことができる！！

ニタリ

と音が聞こえてきそうな笑顔で命令を下した。

「董卓サンを殺します。みんな進撃用意。」

関羽が夢見た、劉備の義の天下道はここに

潰えたのだった。

決戦＜死想＞（後書き）

遅くなつてすみません。

また、遅くなるかもしれませんが頑張るので応援お願いします。

また、オリキャラ作成は任せてください。

出来るのは

「バカテス・恋姫無双・ネギま・リリカルなのは・東方・銀魂」ぐらいですが。

決戦<死走>(前書き)

お久です。

決戦<死走>

劉備軍は進む。

董卓軍本陣に直行する。

其の兵の目は恐怖以外何もなかった。

唯でさえ勇将関羽が戦死してしまったのだ。普通であつたら立て直すのが定石だが、劉備は進軍を宣言した。

むろん、早まってはならないと諸葛亮は進言した。

しかし、帰ってきた答えは肯定でも否定でもない・・・剣であつた。

有ろう事か劉備は諸葛亮を斬り“捨てた”のだった。

まるで役立たずを見るような冷めた目で。

最早、劉備の頭は亡き義妹の復讐、弔い合戦しか無かつたのだった。

これには、もう一人の義妹・将・参謀ましてや兵達をも身を凍らせた。

この劉備軍、今や修羅の軍にしてその数2千。迎え撃つ月の本陣には2万もの兵がいるが、生死を越えた修羅兵を相手に、ましてや賈馱・李儒と文官しかない本陣では月の元に辿り着くは勢いの問題である。

其の危機を風で感じた益荒男が一人・馬嵯禍、袁紹の陣の中腹にいた。むろん其処に行くまでには数多の袁紹の兵達を潰していったからだというのは割愛しよう。

本陣目掛け突進する緑の旗から、禍々しい気を感じていた。

(このままでは・・・月の身が・・・)

そう思い、本陣に戻ろうとして後ろを向いたその時

「トス」

と、右肩に一本の矢が刺さっていた。

普通だったなら、刺さったのかと思うが馬嵯禍は違う。其の肉体は「コッパハン神の試練」で守られているはずなのだ。弓のサーヴァント以外で唯の矢が馬嵯禍の肉体に刺さるはずがない。

思わず右肩を見ようとした瞬間、

シユルシユルシユル・・・グサグサ

と突然矢から根っこみたいのが張り付いてきたのだ。

馬嵯禍は以前イリヤに“もしもの時の危ない宝具”を教えられていてこれに似た武器があることを知っていた。

それは、様々な種類の樹木に寄生し特に繁茂が激しい場合には宿主を枯らしてしまうと。

その枝で作られた剣は、いかなる武器でも傷つけることは出来ない光の神を殺して見せた。

故に、『宝具封じ』と『神殺し』の概念を持つ最強の部類に当たる宝具『光神射殺す宿木の剣』^{ミストルテイン}には気をつけて、と。

馬嵯禍はこれをどうするかと同時に何故これがこの世界にあるのか考えた。

これを放てるのは『盲目のアース（ヘズ）』・『狡知の神』^{ロキ}しかおらず、ましてや要る気配すらしない。

考え事をした瞬間、そんなことなどどうでも良くなった。

月が、我が主が悲鳴を上げたのだ。

理由はそれだけでいい。今はどんなことでも月を守らなければならぬ。

それが、満月と亡き主^{ヤセイ}に交わした誓いなのだから。

く戦場近くの森く

「・・・ふむ。成功じゃな。さして、とこれであの狂戦士はこの世界から外れるじゃろ。」

そういうと腰に宝石で出来た剣を帯びている老人はまるで最初から居なかったが如く、消えたのだった。

決戦<死走>（後書き）

これ読んでる奴いんの？

設定糞じゃね？w

・・・じゃ読むなよ。とメールでいただいた自分です。感想は感想板に書いて悪いところを指摘してくれ・・・と言いたくなってきました。

決戦<死恨>(前書き)

渾身の出来きたー！ー！感想御待ちしています。

決戦<死恨>

「つく、つは!!!」

「なかなか・・・そら!」

桜凛が小剣で趙雲の槍をなんとか防ぎ。

「うりやりやりやー!!!」

「つち、つせや!!!」

なんとかギリギリで本陣に間に合い、張飛の矛を防ぐ士郎。

「つく、左軍後退!!右軍の余兵は猛進する中央を防げ!!」

「・・・ひぐ・・・左軍、右軍合流して・・・ぐす、中央突破を・・・えぐ・・・お、お願いします・・・もうヤダヨ・・・朱里ちゃん(ちやき)・・・あわ・・・。」

枯れるくらい声を上げ、兵の多さを武器に進軍する劉備軍を防ぐ詠

対して最早この場から逃げたい、しかし念の為に劉備が態々剣を抜かせた護衛兵を送り行動を制限させ、涙を流しながら死兵を送りだす鳳統。

・・・そして・・・

「アははははハハははハハハは！！！！・・・死ね・シネ・・・しね！！」ブーン、ブーン、ブーン。

「く、は、ひ、きゃ・・・や！！」キン、カン、キャン、ティン、ガキン！

最早、善君の面影も無く、血に塗れ拭う事もせず、唯剣を振り回す。だが、確実に月の命を脅かす劉備。

危なっかしく、それでも足掻き劉備の斬撃を防ぐ月。

嘗て無い防衛戦が繰り広げていた。

「もう、めんどくさいな・・・サツサト死んでくれないカナ、董卓さん？」と円つぶらな、心の籠こごって無い瞳で見つめる劉備。

「ふ、ふざけないでください！そもそもこの戦争を始めたのは彼方達。ましてや、先手も彼方でしょうが！！それを「ウルサイナ・・・私が死ねって言うてんだカラ・・・サツサとシネ！！」くあ！！」

鏝くわぜり合いに持ち込まれた瞬間、体格差で押し込まれ更に蹴りを腹に喰らい、地に転がってしまった月はなんとか立ち上がったが・・・

「アハはははハ、愛紗ちゃん・・・敵・・・取ったヨ！！」

「ひ、あ・・・あう・・・」

既に上段に剣を構え、振り下そうとする劉備の姿が見えた。

「・・・御免なさい・・・みんな・・・な。ごめ泣くんじゃねえ！
！・・・え？」

「だくザン、ブシュツ>れ・・・え？あ、ああ、あがアあああ嗚呼
アア！！・・・う、腕が！右腕が！！」

誰が予想出来ただろうか・・・

「てめえ、何月を・・・俺の・・・」

味方からも邪魔扱されながらも努力を怠らず・・・

「・・・俺の・・・お、俺の」

圧倒的武を誇る武官からは存在を疑われ、文官からは媚売りと陰口
を叩かれて尚も努力し続け・・・

「俺の……従妹を……手前の我欲で……穢すんじゃね!!」

唯、唯一血の繋がりを持つ魔王を守るため、英雄から見れば雑草に
変わらない……だが雑草だからこそ生き汚く、信念を貫いた将、
牛輔その人であった。

「関羽が死んだだあ？だからなんだ！……手前達は小次郎を、羽賛
を討ち取ったんだろう！むしろこっちが損してるだろうが！なの
に仇打ちだあ？ふざけてんじゃねえ!!」

真唐は喚くように、だが確信を得て劉備に吠えた。

「う、煩い！煩い煩いウルサイ煩い!!黙れダメ黙れ黙れ!!彼
方達のような凡愚よりも愛紗ちゃんのほうが生きる価値があるんだ
!彼方達の様な死んでも悲しむ奴が居ないんだか「彼方が黙りなさ
い!!」んな!」

劉備も喚くが月に一喝され後ずさった。月の瞳は……冷め切って
いた。

「悲しまない人がいない？なら彼方が哀れた。彼方の為に戦った兵
が、散った将が可哀想だ。ああそうですか。もうあなたは、かの善
君劉玄德では無いんですね。……人が死ねば誰かが泣く……賊
でも、犯罪者でも、誰も彼も関係なく……そんなことすらも忘れ
てしまったのですね……哀れ過ぎてさっきまでの私が恥ずかしい
です。」

最早、月は劉備を見ていない。見ているのは吠え喚く駄犬と、長年の付き合いでもあり将として、何より従兄として頼りに成った真唐を見ていた。

「あ・・あぐ、黙れー！ー！ー！つく、そ、そ、うだ剣！剣は「探し物はこれかね。劉備殿？」・・あ、ああ。な、なんで。・・なんで！ー！鈴々ちゃんは！星ちゃん、雛里ちゃんは！ー！」

劉備の前に現れたのは劉備の剣を持った土郎、桜凜そして詠の三人であった。

「ああ、彼女達なら敗れて拘束したわよ。後は彼方だけだけど・・・どうしても御話したいらしい子が居るから連れてきたわ。」

と桜凜の後ろから帽子を深々と被った鳳凰の雛、鳳統であった。其の後も縄で拘束された張飛と趙雲の姿が見えた。

「な、何やってるの！鈴々ちゃん、星ちゃんも。なんで・・・なんで！ー！どう「桃香様」・・なによ雛里ちゃん！ー！」

「・・な、なんで朱里ちゃんを斬ったのですか？」

何気ない。だが、どうしても聞きたかった事を勇気を出して聞いてみた。

その結果は・・・残酷だった

「理由？そんなの簡単だよ。朱里ちゃんが悪いんだ。軍を引こうつてさ。馬鹿じゃないの。そんなんじゃ愛紗ちゃんの敵が討てないじやん！！」

「分かった？これが理由！分かったらさと董卓を殺し「劉備軍は董卓様に降伏します。手土産として<グサツ>劉備の首を献上します。」あ・・あが・・ひ、雛里ち「私の真名を・・呼ぶな！！」<ドス、ドス！ドス！>あぎ・・あ・・ひぐ・・が・・あ、り、鈴々ちゃん・・た、助け「御免なのだ・・でも、今の桃香義姉ちゃんじゃ、愛紗は報われないんだ！！だから・・御免なのだ。」そ、そんな・・せ、星ちゃ「愛紗・・許せ・・」う、うわ・・あ・・げ、げほげほ・・な、なんで・・なんでなの。なんで！！なんでなんでなんで<ザンツ>「・・それが彼方の限界。そして・・報いです。死の国にて関羽さんに謝りに行きなさい。」

劉備は最早壊れた玩具のように、同じことを繰り返しながら・・月の手によって首を飛ばされたのだった。

それと同時に・・

「も、申し上げます！鳳統様。．．しよ、諸葛亮様．．い、息を．．ぐうう。」

「そう、ですか。．．朱里ちゃん、ごめんね。言い方は悪いけど．．仇は取ったよ。」

ここに、三国志を代表する英傑二人が．．舞台から消えたのだっ
た。

決戦<死恨>(後書き)

今年での投稿はこれで最後・・・かも。

決戦<死戦>(前書き)

顔良、文醜は演義よりです。ぶっちやけ強いです。まあ、その勇姿は次回ですが。

決戦<死戦>

「申し上げますー！りゅ、劉備殿討ち死にー！」

そう、前線より齎された情報を得た袁紹は一言。

「あら、そうですね。」

と、素気なかった。

「まあ、劉備さんも御苦労さま・・・善君なのですから巨悪を倒すのは当然の事。董卓さんとは相討ちでもしてくれましたのですか？」

「い、いえ・・・董卓の存在本陣にて確認。相手の全兵力凡そ、七万。また、呂布・張遼・華雄・巨人も本陣に集結。決戦の構えかと。」

「そうですね。華琳さんをぎゃふんと言わせ、美羽さんを苛める孫策さんをケチヨンケチヨンにして、董卓さんの将を頂くための連合軍・・・半ば成功ですわね。まあ、孫策さんが死んだのは想定外ですがこれで江東は美羽さんの物。引いては私の物になったも同然。あと、邪魔なのは・・・あの黒光りする木偶の坊さんですわね。その彼方達、巨軀弩砲（じゆうこくぱう）の用意をなさい。斗詩さん、猪々子さん、此方も決戦の構えですわ。雄々しく・猛々しく・勇ましく・・・雄叫びを挙げなさい！ここに居る十八万の兵達よ。二万の同報の敵・・・ここで晴らしなさい！！名門袁家に相応しき四文字「蹂躪制覇」をここに成し得なさい！」

「はいー！！」

ここに、歴史に残る「反董卓決戦」の終幕が上がる。

役者たちよ、存分に踊りたまえ。

「皆さん、御無事ですか。」

月は皆の安否を気遣うも、

「ばかやろう、お前が一番心配だったの。あんまり、人斬ったこと無いのに無茶しやがって。」

「へ、へうう〜。」

慎二によって、崩れ去った。

「それよりも最後に残った本陣である袁紹軍にも動きがある。此方に合わせ、決戦の構えだな。将の質と数は此方が上だが、兵力はあちらが上だ。数の暴力とはこの事だな。」

と、葛木が漏らす。

だが、

「心配・・・無い」

「そうやで、そんな十万の差なんぞ屁でも無いわ。」

「ふん、我が武の見せ処だ。董卓様に仇名す、愚か者の終幕を刻み

込んでくれる。」

と、董家三将は息を巻いていた。そんな姿を見て笑みを浮かべる董卓軍。

「さあ、行きましょう。この戦いの終幕を勝利で飾ります。皆さん、わたしに力を！！」

「oooooooooooo（ははっ）！！」「」「」「」「」「」

（……この戦いが終わる頃には我が命、もう持たないだろう。せめて、主・月を守って見せる。否、主・月に勝利の報せを！！）

「……？旦那？」

宿り木の呪いを受け、残る魔力に全てを賭け主に勝利もたらさんとし、先陣を切る馬嵯禍。何所と無く不安が過る聖羽。

いざ、開幕の時

だが、其の時

ズドン

ヒューーーーーー

「――」

「……！」

ドス！！

突如として杭が飛来し

馬嵯禍の左胸に直撃した。

「ク、クレスさーん?!?!」

幸いにも、心臓を外したものの、不意を突かれ更に右肩・左足に深く被弾。

遂に巨人は、膝を着いたのだった。

「な、何してんだよ！お得意の再生は出来ないのかよ!!」

「この馬鹿ワカメ!!喚いたら兵にも伝染しちゃうでしょ!!」

「無理だ桜凜・・・既に広まってしまっている。っち、盾を構えろ！攻撃を避け!!」

慎二が喚きそれが更に混乱を呼び、桜凜が沈めるも既に一万近く右往左往して、それを庇うべく土郎が兵を指揮する。

だが

「へっへへー、どうよ。アタイらの最終兵器<巨軀弩砲>。対象がデカければ威力を増す特注の弓だぜ。まあ、一回ポッキリが玉に傷だけどな。でも、弓だけがアタイらの武器じゃねえ。」

「圧倒的な数。内、河北騎馬隊十万の破壊力。見せてあげます。」

「「突撃　　！！」」

合図と共に十八万の大軍と七万の寡兵といった泥沼の戦いになる。

・・・と思いきや

「——舐めるな——小娘共——

！！！！」

膝を着いた体勢から一気に跳躍。十万の兵達の先端に着地し、かえす斧剣で先頭を薙ぎ払った。

人が飛ぶ・・・最早、見慣れた現場であった。

馬嵯禍は、その手に持った無骨な斧剣を更に縦横無尽に振り回す。

それは剣技といえるものではなく、戦いといえるものですらなかった。

その無造作な一撃に、将兵が集団で弾き飛ばされ、四肢や胴体を潰される。

一方的な虐殺の絵がそこにはあった。

「つく、一筋縄ではいきませんか」

「仕方ねーよ、斗詩。ま、あいつかなり傷ついてるし、ほついても大丈夫だろう。他にも呂布とか張遼とか、いっぱい入るんだからさあいつ等からと倒そうぜ。」

「ぶ、文ちゃん。そっちの方も厳しいと思うけど？」

「大丈夫だって、あいつ等も結構疲れてるんだからさ。無理だったら、困るじまえばいいし。」

と樂觀視する文醜、相手が相手なだけに慎重になる顔良。

決戦は始まったばかりである。

決戦<死戦>(後書き)

・・・なんか不調な感じがするが、違和感があったら感想板にどしどし書いてくださいね。

決戦<死乱>（前書き）

血溜まりスケッチ事、魔法少女まどかマジカに嵌って早三週間。早く続きがみたい！！

虚淵玄先生の描く恋姫が見たくてたまらない！！

決戦<死乱>

「チィ！」

と舌打ちしながらも敵を薙ぐ蘭。

「おらー！！！」

と獲物を振り回す霞。

この二人で今、董卓軍の先陣を持ち堪えている状態であった。

恋は、聖羽・音々音と共に袁紹軍本陣に突貫していた。

馬嵯禍も奮戦しているものの、宿木の呪いで宝具を無効化されてしまいいまや槍も突き刺さるようになり、泗水関のように暴れる事が出来ず中軍の矢盾状態であった

161

其処に

「うおおおおおお！」 「りゃあああああ！！！」 と気合一閃。文醜の大剣が・顔良の大鎚が二人に襲いかかった。

「しゃらくさい！」 と振り向き様一閃で霞は文醜に襲いかかった・
・が、

「なめんな！」 と一閃を大剣の腹で受け止め、余裕の出来た右腕で霞の腹を強打し落馬させたのであった。

「霞！！」余裕が有るのですか？」・・・んな！！がは！！」

と蘭もまた顔良の鎚で体を叩かれ落馬してしまっただった。

「？！つぐ！」と蘭はすぐに立ち上がったが鎚と落馬の影響で肋骨が何本か折れ、左腕が肩から脱臼していたものの直に右腕で左肩と左腕に力を入れ応急処置を施したが、どう見ても戦力ダウンが目に見えていた。

「ここまでですね。降伏するか、自害するか。どちらかを選んではどう？」と顔良が説いた。

無論答えは、

「否、ここで貴様を倒し袁紹の首を取る。あそこで戦うクレスの為にも、ここで倒れるわけにはいかん！！」

「なら、平伏しなさい。この地を這いずり、董卓の御印を挙げるその時まで。」

片や歴史上、江東の虎・孫文台を打ち破り連合の猛者達を一蹴した
関西の雄。

片や正史にて、徐晃、張遼と魏の五大将の二人に圧勝した北袁の将
討ち取るはずの軍神はこの世に無く、彼女らの無双を止められる兵
もおらず。

唯、見守る他が無かった。

一方、合肥の騎神ともう一人の北袁の將の戦いは圧倒だった。・・・
文醜の。

「ジャマヤーー！！！」

「ほいっと。へへっ、騎馬戦じゃあたいの負けだったか！！！」

「うぐ！」

「歩兵戦だったら、あたいが上だー！！！」

北方の騎馬民族出身の両者。しかし、士官先が違った。董卓軍は騎馬民族の多い西涼が故に騎馬戦に力を入れていた。

だが、袁紹軍は名族として名を馳せているが、実際將の殆どが顔良・文醜、そして留守を預かる淳于瓊、甥の高幹といった人以外実力があっても利を優先したり、袁紹に媚びたりと二流なので有るが故に、騎馬だけでなく歩戦・弓戦といろいろな事を経験せざるを得なかったのだ。

が、ここにきてその地道な経験が報われる時が来たのだった。

「くそつたれが。あの袁紹だから将もあれかなと思つたいたが・・・
予想が外れツスギや！！！」

「へっへっへ。どうするよ、降伏するならあたいが進めてあげるよ。

断るんなら、この文醜様の武勇伝の一つにしてやるよ。」

「っはは、冗談は大概にしい。そう言うならそっちが降伏せい。今だったら顔拳一発で許したるで。」

「出来ないねえ……なら。」

ッザ！

「「死ね（や）——！！」「」

戦いは中盤に進む。

決戦<死乱>(後書き)

まだまだ続く。しかし入院生活も続く。来ないのは感想だけ・・・
感想ください！因みに理想郷ことArcadiaでも書こうか悩
んでいます。意見ください。お願いします。

決戦<死鬼>（前書き）

最近、ISの二次小説「インフィニット・ストラトスVSオービタルフレーム」に嵌っています。

男らしい主人公に成長する原作主人公。特に第4話は傑作だと拍手を送りたい。

後、「なんで、お前なんだ」・・・このセリフマジでヤバイ。

これのおかげ（せい？）で積み小説が増えてしまった。

次回はISで行こうかな？

決戦<死鬼>

鎚と斧、斬馬と長刀が苛烈に打ち合い、終局を迎えようとした時、
飛將軍は・・・

時は遡り。

連合軍本陣である袁紹軍に龍が鮮血と共に舞っていた。

本陣には八万の兵が、精銳がいた・・・にも拘らず、彼らは次々に散って逝った。

「つく、ええい！誰か、誰かあれを止められませんこと！！」

と、袁紹は怒鳴るも。

「・・・いく」

と鬼神の前では無意味であった。

更に、本陣近くではねねの采配により呂布騎馬隊は袁紹軍を翻弄し、其の先頭を走る聖羽の剛斧で兵達は蹴散らされていた。

彼女の前では矢も槍も意味を成さず、新兵器の巨軀弩ですら簡単に避けられていた。

流石に袁紹も懲り・・・覚悟を決めた。

「私は連合の・・・いえ、袁家筆頭！袁本初！参りますわ！！」

「・・・いい。」

と宣言し剣を抜刀し、其のまま恋に突っ込んでいった。

恋も追撃に出ようとした時。

「「まてい！我が姫君を討つ前に我らを」・・・煩い」う・・・つが。」と恋の意識を此方に向けようとして、突っ込んだ？元進・韓？子の二将を引き裂いたが、

「姫を討たせるな――！！」と参謀・審配の号令と共に勇気ある五千の兵が恋に殺到した。

それでも、瞬く間に蹂躪し改めて袁紹の方へ向き直し、戟を振り落とそうとして・・・「斬！」と、戟を持った手が宙に舞った。

「え？」

と恋が後ろ向くと、

「我が、名、は臧洪。亡、き盟友、張超、の敵、取ら、せて貰った・・・ぐふ。」

と、肩から斜めに切られ細かく息をしていた臧洪と名乗った将が、崩れ落ちて逝った。

同時に前を向くと・・・眉間に剣先が深く刺さるのが、ゆっくりと見えていた・・・

連合軍から壮大な雄叫びが戦場に響いた。同時に袁紹の口から、

「飛將軍、呂布奉先。袁本初が討ち取りましたわ!!」

と董卓軍に絶望を突き付けたのだった。

「あ、有りえ無い・・・有り得ないのです!!恋殿は・・・恋殿は無敵なのですぞ!!それが・・・それが!!」

しかし、ねねの眼前には・・・恋の首級が袁紹軍の軍旗に縫い付けられていた。

ねねは必死に精神を保たせ、軍を引き返そうと後ろを向いた刹那、

ドスッ

と共に落馬してしまったのだった。

ねねは急いで立ち上がろうとしたものの、落馬した性で全身が痛み、更には背中に矢を受け立ち上がれなかったのだ。其処に、

「はっはっは!死ねえい。」

と、袁紹騎馬隊の先兵・蒋奇に声を上げる間もなく止めを刺されたのだった。

「はっはっは!これで呂布軍は虫けらも同然。一気に」でりゃー

「……!」……がぼ!

と、蔣奇もまた、聖羽に一刀のもと討たれたのだった。

「恋さん……ねね殿……つく!!……全軍一時本陣まで撤退、二人の死を無駄にするな……!」

と、聖羽の号令で撤退する呂布軍は悲しみに包まれていたのだった。

今言える事は……最強を名乗った鬼神は、ここに幕を下ろしたのだった。

決戦<死鬼>(後書き)

・・・なんかこの小説、最近原作アンチでもはいつているのかな??

少し不安だ。

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026k/>

漆黒の狂戦士と薄幸の魔王

2011年5月15日22時34分発行